幸福の価値観
ーアジア７カ国の主観的幸福度を用いた実証分析ー

日本国際経済学会　第１回定例研究会 第２報告　2020年6月20日（土）

同志社大学　総合政策科学研究科　後期博士課程
滝本香菜子

はじめまして

同志社大学　総合政策科学研究科　博士後期課程

開発経済学　パリ政治学院　タイの生産ネットワーク

主観的厚生　主観的幸福

報告予定

01 先行研究
4-8 幸福研究の歴史

02 モデル
9-12 幸福モデルと推定モデル

03 データ
13-16 アジア・バロメーター

04 推定結果｜モデル１
17-28 幸福の構成要素

05 推定結果｜モデル２
29-31 幸福と年齢の関係

06 まとめ
32-36 最も幸福な人とは

1

先行研究

幸福研究

Easterlin

1974

「幸福のパラドクス」「イースタリンパラドクス」：
一国時系列と一時点の国際比較において
所得と幸福は相関しない。

Veenhoven

1991

国際比較においても、
幸福と所得には緩やかな正の相関が見られる。
「所得の飽和点仮説」：所得額が増加しても
それ以上、幸福度は上昇しない点がある。

Di Tella et al.

2008

個人選好の構成要素と幸福の関連を分析。
「所得の増加」と「平均寿命の延伸」が
最も幸福に影響を与える。

2015

Waldinger

人々を健康に幸福にする要素は「人間関係」

反対に「孤独」が寿命を縮める。

家族や友人、コミュニティーとのつながりが

強い人ほど幸せで健康的に長生きする 。

2020

Blanchflower

幸福度と年齢の関係において

先進国では47.2歳、途上国では48.2歳で

最も幸福度は低下する。

世界幸福度ランキング（国連 2020）

1位　フィンランド（3年連続）

25位　台湾（アジア最上位）

62位　日本

先行研究のポイント

- 「幸福のパラドクス」「イースタリンパラドクス」：
  一国時系列と一時点の国際比較において所得と幸福は相関しない。

- 幸福は、他者との比較による相対的に決まる：
  社会規範・消費規範（social norm）生活水準（standard）と比較し、判断する。

- 幸福には、絶対的な側面もある：相対的な一面もあるが、幸福には衣食住などのベーシックニーズの充足を満たす必要があり、絶対的な基準が存在する 。

- 「 所得の飽和点仮説」：国際比較においても幸福と所得には緩やかな正の相関が確認されるが、所得のプラス効果は徐々に弱まる。

研究目的

アジア地域の幸福を実証研究で明らかにすること

1. アジア地域に共通の幸福要因はあるのだろうか、
あるとするならば欧米とは異なるのだろうか？

2. 長生きすることは幸福に影響するのだろうか？

2

モデル

幸福モデル｜Di Tella et al. (2008)

$$HAPPINESS_{i,s,t} = \alpha MACRO_{s,t} + \beta MICRO_{i,s,t} + \delta INTWRACT_{i,s,t} + \eta_s + \lambda_t + \mu_{i,s,t}$$

[*HAPPINESS*：幸福度、*MACRO*：国別幸福要因、*MICRO*：個別幸福要因、*INTWRACT*：相互要因、
ηs：国別ダミー、λt：年次ダミー、$\mu i,s,t$：誤差項]

マクロ指標：「Life Expectancy」「SOx Emissions」「Hours Worked」「Crime Rate」「Divorce Rate」「Inflation Rate」「GDP Growth」「Unemployment Rate」「Openness」「Unemployment Benefits」「Income Inequality」「Government Consumption」

ミクロ指標：「Employment Status」「Personal Income Position」「Education」「Size of Community」「Sex」「Age」「Age Squared 」「Marital Status」「Number of Teenage Children」

- 1975-97年のOECD諸国40万人のアンケート調査から、各構成要素の幸福への寄与度を明らかにした 。
- 最も大きな影響を与える要素は、「所得の増加」と「平均寿命の延伸」。

モデル1

$$HAPPINESS_{i,s,t} = \alpha MICRO_{i,s,t} + \delta INTWRACT_{i,s,t} + \eta_s + \mu_{i,s,t}$$

[*HAPPINESS*：幸福度、*MICRO*：個別幸福要因、*INTWRACT*：相互要因、*ηs*：国別ダミー、
μi,s,t：誤差項]

$HAPPINESSi,s,t$：

s =（日本・韓国・中国・タイ・マレーシア・ベトナム・ミャンマー）に住む、

個人 i、t = 2003-07年の幸福度

$MICROi,s,t$ ：

個別幸福要因を全てダミー変数化
「所得（４分位）」、「生活水準」、「年齢（世代別）」、「学歴」、「就労状況」、
「英語」、「婚姻状況」、「ジェンダー意識」、「住居」、「世帯構成」、「介護」、「宗教」など

$INTWRACTi,s,t$ ：

上記の説明変数に女性ダミーをかけた交差項

モデル２

$$HAPPINESS_{i,s,t} = \alpha MICRO_{i,s,t} + \delta INTWRACT_{i,s,t} + \eta_s + \mu_{i,s,t}$$

[*HAPPINESS*：幸福度、*MICRO*：個別幸福要因、*INTWRACT*：相互要因、*ηs*：国別ダミー、
μi,s,t：誤差項]

$HAPPINESSi,s,t$：

s =（日本・韓国・中国・タイ・マレーシア・ベトナム・ミャンマー）に住む、

個人 i、t = 2003-07年の幸福度

$MICROi,s,t$ ：

個別幸福要因を全てダミー変数化
「所得（４分位）」、「生活水準」、「学歴」、「就労状況」、「英語」、
「婚姻状況」、「ジェンダー意識」、「住居」、「世帯構成」、「介護」、「宗教」など
■ 年齢の影響を世代別ダミー変数ではなく、「年齢」と「年齢の２乗」を利用。

$INTWRACTi,s,t$ ：

上記の説明変数に女性ダミーをかけた交差項

3

データ

躍動するアジアの価値観に関する調査（アジア・バロメーター）

調査年	2003	2004	2005	2006	2007
調査対象（国と地域）	China	Brunei	Afghanistan	China	Cambodia
	India	Cambodia	Bangladesh	Hong Kong	Indonesia
	Japan	China	Bhutan	Japan	Laos
	Malaysia	Indonesia	India	Korea	Malaysia
	Myanmar	Japan	Kazakhstan	Singapore	Myanmar
	South Korea	Laos	Kyrgyzstan	Taiwan	Philippines
	Sri Lanka	Malaysia	Maldives	Vietnam	Thailand
	Thailand	Myanmar	Mongolia		
	Uzbekistan	Philippines	Nepal		
	Vietnam	Singapore	Pakistan		
		South Korea	Sri Lanka		
		Thailand	Tajikistan		
		Vietnam	Turkmenistan		
			Uzbekistan		
注）背景は調査回数	1度目	2度目	3度目		

出典：滝本香菜子（2018）

7 対象国

日本・韓国・中国・タイ・マレーシア・ベトナム・ミャンマー

3 対象期間

2003 ～ 2007年（2005年を除く）

59 対象者

各国　20-59歳の男女

800 データ数

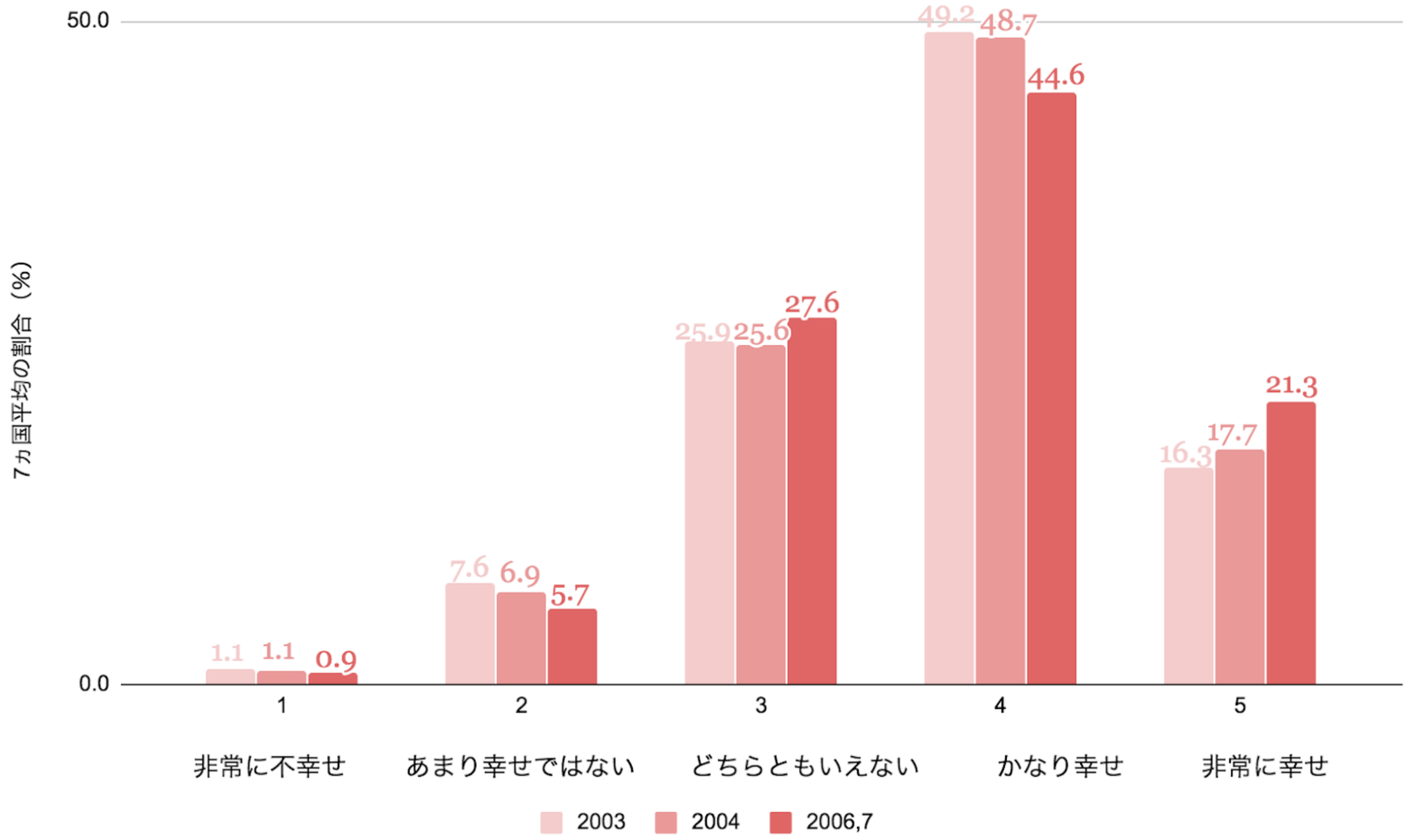
5,292（2003）; 5,277（2004）; 6,663（2006,7）

Q. All things considered, would you say that you are happy these days?

5 STEPS 1 Very happy,
2 Pretty happy,
3 Neither happy nor unhappy,
4 Not too happy,
5 Very unhappy,
（9 Don’t know）

5 Very happy
～ 1 Very unhappy」

７カ国平均　幸福度の割合（%）



アジアは幸せになっている

- 幸福度の平均値は、高まっている。
- 2003年（3.72）、2004年（3.75）、2006,7年（3.80）
- 「かなり幸せ」から「非常に幸せ」な人が増えている。
- 「非常に不幸せ」や「あまり幸せ」ではなかった人々も「どちらともいえない」程には幸せを感じられるように変化している。

4

推定結果｜モデル 1

Key for Happiness

所得

下位　25%（ベースライン）

下位　50%

上位　50%

上位　25%

生活水準

平均（ベースライン）

低い

やや低い

やや高い

高い

婚姻状況

既婚（ベースライン）

独身

離別（離婚・別居）

死別

ジェンダー意識

男女平等（ベースライン）

男性優位

女性優位

住居

持ち家に住む

介護

介護している

所得

- 男女差なし。
- 2004年の最も所得が高いグループの係数のみ1%水準で統計的にプラスに有意。
  2004年「上位25%」（＋4.09% ポイント）

変数（基準）		（1）2003	限界効果	（2）2004	限界効果	（3）2006,7	限界効果
	下位50%	0.0505	1.19%	0.0145	0.35%	-0.0324	-0.85%
		(0.0615)		-0.0601		-0.0561	
所得	上位50%	0.0419	0.98%	0.0662	1.62%	-0.0289	-0.76%
（下位25%）		(0.0578)		-0.0621		-0.055	
	上位25%	0.0990	2.35%	0.164***	4.09%	0.023	0.61%
		(0.0629)		-0.0631		-0.0592	

生活水準

- 男女差なし。
- 生活水準が平均よりも高いと感じるほど幸福度が高く、低いと感じるほど低い。

2006,7年「やや低い」（−12.99% ポイント）＞「低い」（−16.69% ポイント）
「高い」（＋22.30% ポイント）＞「やや高い」（＋12.40% ポイント）

- 実際の所得水準よりも自己評価の生活水準の方が幸福度に影響する。
- 生活水準は、全ての変数が1%水準で統計的に有意。一方で所得は、2004年「上位25%」のみ1%水準で有意。

変数（基準）		（1）2003	限界効果	（2）2004	限界効果	（3）2006,7	限界効果
生活水準（平均）	低い	-0.878***	-13.05%	-1.003***	-15.11%	-0.931***	-16.69%
		(0.115)		-0.118		-0.0983	
	やや低い	-0.487***	-9.36%	-0.548***	-10.91%	-0.593***	-12.99%
		(0.0624)		-0.065		-0.06	
	やや高い	0.281***	7.20%	0.414***	11.33%	0.422***	12.40%
		(0.0744)		-0.0762		-0.0693	
	高い	0.992***	31.69%	0.554***	16.16%	0.704***	22.30%
		(0.188)		-0.196		-0.169	

婚姻状況

- 男女差あり。
- 既婚者の幸福度が最も高い。
- 期間は異なるが限界効果は、死別、離婚、独身の順にマイナスの影響が大きい 。

2006,7年　独身（−8.29%ポイント）＜　離別（−10.59%ポイント）
2004年　死別（−14.90%ポイント）

変数（基準）		（1）2003	限界効果	（2）2004	限界効果	（3）2006,7	限界効果
婚姻状況（既婚）	独身	-0.390***	-8.27%	-0.346***	-7.69%	-0.336***	-8.29%
		(0.0645)		-0.0691		-0.0604	
	離別	-0.483***	-8.86%	-0.547***	-10.39%	-0.486***	-10.59%
		(0.160)		-0.166		-0.146	
	死別	-0.422*	-7.98%	-0.981***	-14.90%	-0.360*	-8.29%
		(0.238)		-0.307		-0.193	

婚姻状況（女性）

- 2003年は、既婚よりも独身や離別した女性の幸福度が高い。
  2003年　独身（＋5.96%ポイント）＜ 離別（＋10.14%ポイント）

- 2004年は、既婚よりもパートナーと死別した女性の幸福度が高い。
  2004年　死別（＋19.71%ポイント）

✓ 2001年発表『平成13年社会生活基本調査』によると、
週全体の家事時間（総数）は、女性が162分、男性が14分と男女間で大きく差が開き10倍以上。

女性ダミーとの交差項（基準）

	独身	0.237***	5.96%	0.00514	0.12%	-0.00257	-0.07%
		(0.0853)		-0.0902		-0.0797	
婚姻状況	離別	0.375*	10.14%	0.19	4.93%	-0.191	-4.69%
（既婚）		(0.209)		-0.203		-0.189	
	死別	0.0801	1.93%	0.661**	19.71%	0.274	7.85%
		(0.269)		-0.33		-0.221	

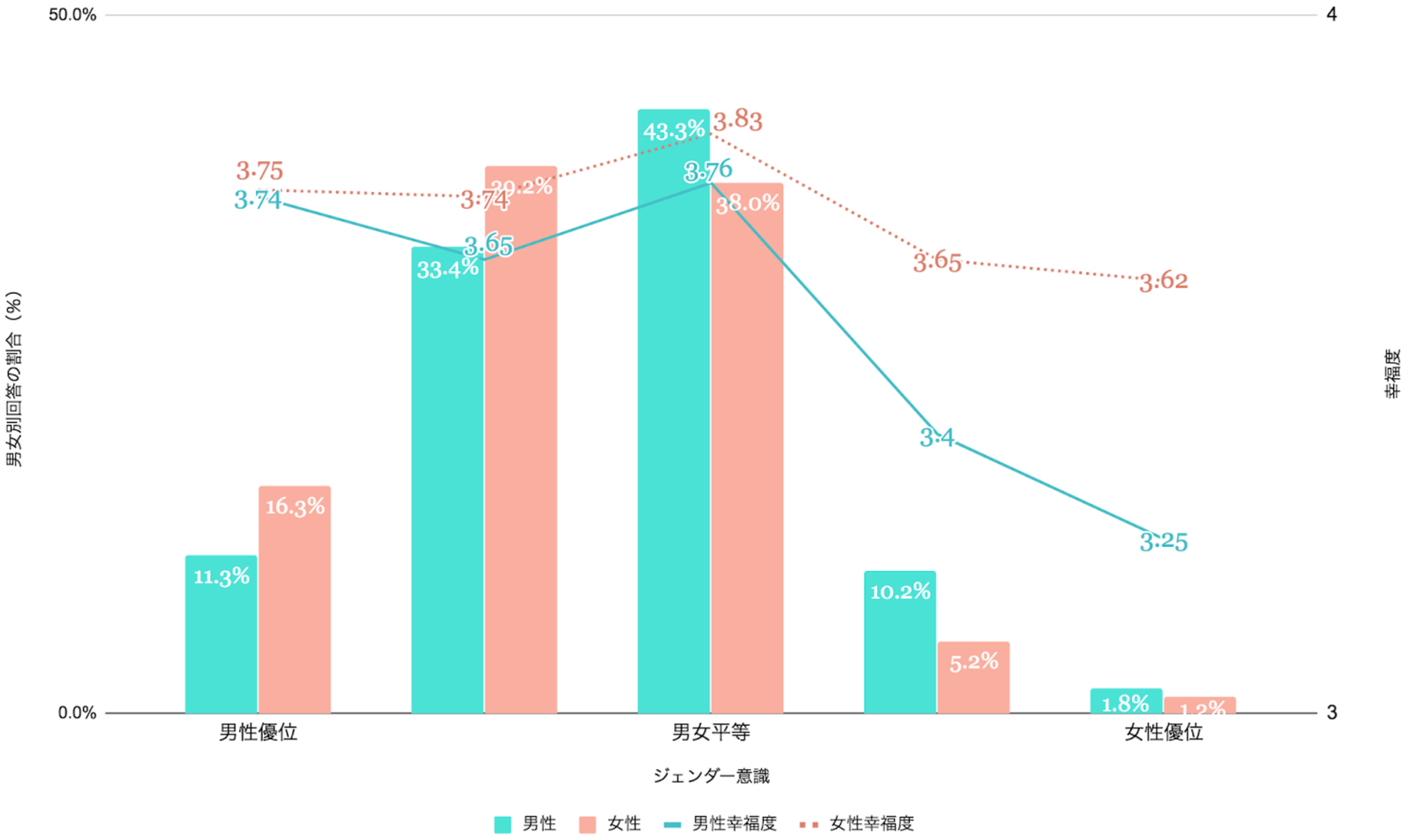
ジェンダー意識

- 男女差あり。
- 男女平等と考える人よりも、女性優位と感じる男性の幸福度は低く、女性の幸福度は高い。
- 「女性優位と感じる」男性へのマイナスの影響よりも、女性へのプラスの影響が大きい。

2004年　「女性優位」全体（−2.87%ポイント）＜　交差項（＋7.25%ポイント）
2006,7年　「女性優位」全体（−5.26%ポイント）＜　交差項（＋6.75%ポイント）

変数（基準）		（1）2003	限界効果	（2）2004	限界効果	（3）2006,7	限界効果
ジェンダー意識（男女平等）	男性優位	-0.0251	-0.58%	-0.0437	-1.05%	-0.00122	-0.03%
		(0.0492)		-0.0503		-0.043	
	女性優位	-0.0949	-2.12%	-0.124*	-2.87%	-0.213***	-5.26%
		(0.0697)		-0.0742		-0.0649	
女性ダミーとの交差項（基準）							
ジェンダー意識（男女平等）	男性優位	-0.105	-2.36%	0.0128	0.31%	-0.0197	-0.52%
		(0.0652)		-0.066		-0.0581	
	女性優位	0.143	3.53%	0.273**	7.25%	0.238**	6.75%
		(0.109)		-0.11		-0.0972	

ジェンダー意識の男女差



男性優位を前提とした社会

- 最も幸福なのは、男女ともに「男女平等」と感じる人々である。

  男女平等：男性（3.76）＜　女性（3.83）

- 男性優位を強く感じる男性の幸福度は、平等意識の男性とほぼ変わらず高い水準である。

  男女平等：男性（3.76）＞男性優位：男性（3.74）

- 男性優位を強く感じる場合の男女差よりも、女性優位を強く感じる場合の男女差が大きい。

  男性優位：男性（3.74）＜女性（3.75）

  女性優位：男性（3.25）＜女性（3.62）

住居

- 男女差なし

- 2004年、2006,7年　持ち家に住む人々は、そうでない人よりも幸福度が高い。
  2004年　（＋3.65% ポイント）
  2006,7年　（＋2.91% ポイント）

✓ 7カ国平均の持ち家率は、全期間70%超
c.f.日本の2003年住宅土地統計調査の平均60%（総務省統計局）

変数（基準）		（1）2003	限界効果	（2）2004	限界効果	（3）2006,7	限界効果
住居	持ち家	-0.00984	-0.23%	0.156***	3.65%	0.113**	2.91%
		(0.0500)		-0.0515		-0.0477	

介護

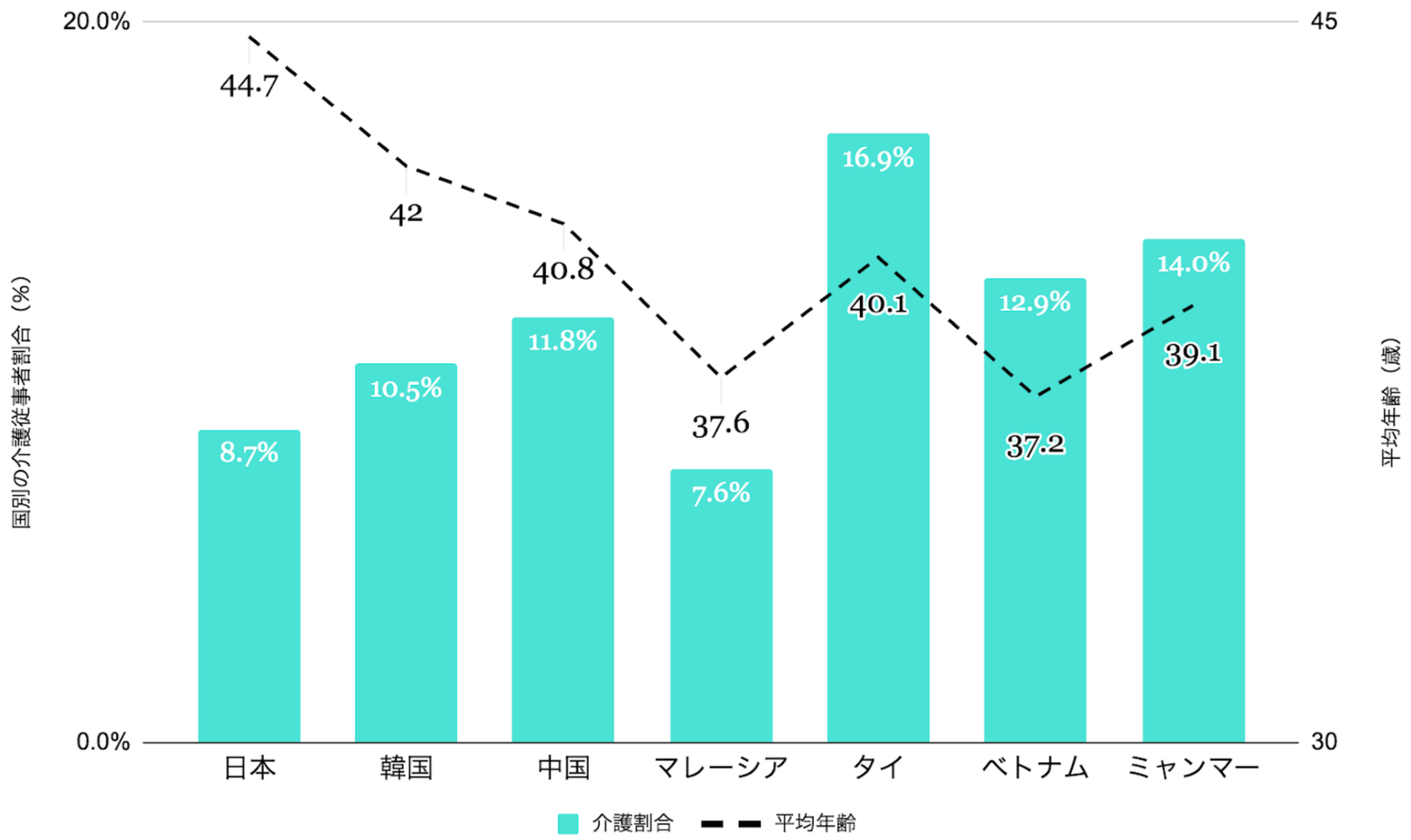
- 男女差なし。
- 2006,7年　介護従事者の幸福度は低い。
  2006,7年（−4.68% ポイント）

✓ 2006,7年　介護従事者は対象国全体において12%程度 。
介護を担う割合が高い職業：「その他の無職」23.9%、「退職者」16.6%、「失業者」16.5%
介護を担う割合が低い職業：「運転手」4%、「その他の雇用者」6.8%、
「企業経営者（従業員30人以上）」7.7%

✓ 学生の9.3%が介護に従事。
日本では2013年の総務省発表の「就業構造基本調査」を基にNHKが試算した人数は、
15～29歳の介護従事者（ヤングケアラー）は全国で17万7,600人

変数（基準）		（1）2003	限界効果	（2）2004	限界効果	（3）2006,7	限界効果
介護	介護者あり	–	–	-0.113	-2.62%	-0.187***	-4.68%
		–		-0.0858		-0.0657	

介護従事者割合と平均年齢



介護はアジアの共通課題

- 介護従事者の割合は、タイが16.9%で最も高く、つぎにミャンマーが14.0%、ベトナムが12.9%と続く。
- 平均年齢は、日本が44.7歳で最も高く、つぎに韓国が42歳、中国が40.8歳である。
- 平均年齢が高いにもかかわらず、日本や韓国では介護従事者の割合が低い。
- 平均年齢が低いタイやベトナム、ミャンマーなどの途上国における介護従事者の割合が高い。

✓ 先進国では社会保障制度が整っている。

✓ 途上国では社会保障制度の整備が不十分。

✓ 介護が主に家族の仕事である。

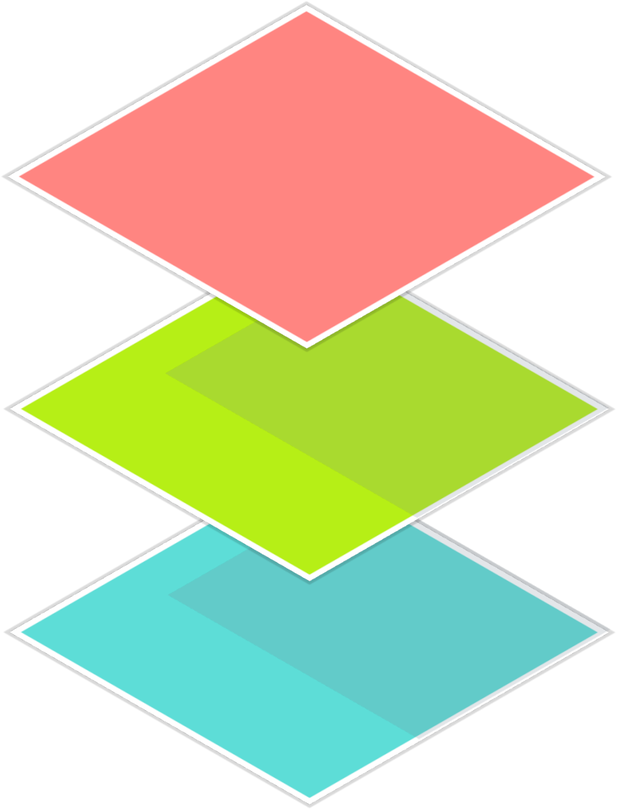
国別幸福度（幸福度に対してその他の条件が同一であると仮定）

マレーシア・タイ・ベトナム

2004年　マレーシア（＋11.16% ポイント）＞
タイ（＋17.85% ポイント）＞
ベトナム（＋7.44% ポイント）
2006,7年　マレーシア（＋16.75% ポイント）＞
ベトナム（＋11.48% ポイント）＞
タイ（＋9.41% ポイント

韓国・ミャンマー

2003年　韓国（−6.09% ポイント）
2004年　韓国（−7.72% ポイント）＜
ミャンマー（−3.63% ポイント）
2006,7年　ミャンマー（−5.70% ポイント）＜
韓国（−3.49% ポイント）



日本

日本を基準に国別ダミーを利用し推定。
中国は有意水準を満たさなかった。

5

推定結果｜モデル２

推定結果｜モデル２

Model２（2006,7年）推定結果

	年齢		年齢二乗	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
7カ国	-0.0331***	(0.00819)	0.000312***	(0.0000947)
日本	-0.112***	(0.0303)	0.00107***	(0.000344)
韓国	-0.147***	(0.0429)	0.00145***	(0.000535)
中国	-0.0513***	(0.0177)	0.000581***	(0.000204)
タイ	-0.0522**	(0.0250)	0.000581**	(0.000288)
ミャンマー	-0.0781**	(0.0304)	0.00101**	(0.000396)

最も不幸な年齢

- 幸福に関わるその他の要因をコントロールし、年齢と年齢二乗の係数がともに統計的有意水準を満たす場合
- 以下の計算式により、幸福度が頂点または底となる年齢を計算することができる。

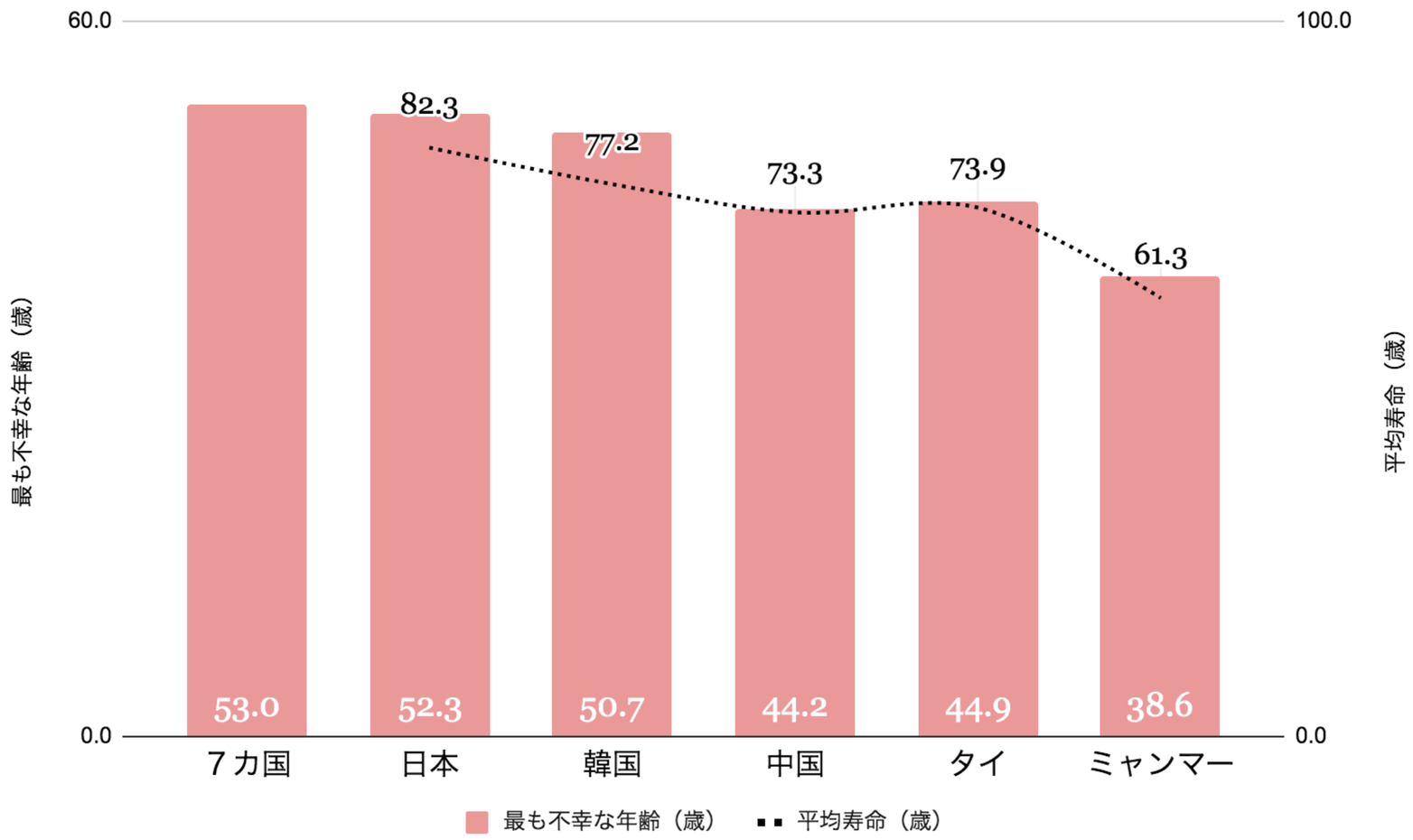
計算式｜Blanchflower（2020）参照

- 「年齢（*Age=-0.0331*）」が負の係数、「年齢の二乗（*Age2=0.0003121*）」が正の係数の場合
- 年齢と幸福度はU字型の関係になり、最も幸福感の薄れるU字型の底となる年齢を推定できる。

$$\{Age = -0.0331,\ Age^2 = 0.0003121\}$$

$$minimum\ age = \frac{-1 * Age}{(2 * Age^2)} = \frac{-1 * -0.0331}{(2 * 0.0003121)} = 53.009\ldots$$

幸福と年齢の関係



平均寿命が長い国ほど最も不幸な年齢も高い

- 平均寿命の長さと最も幸福度の低い年齢が比例する。
- 最も平均寿命の長い日本（82.3歳）では最も幸福度が薄れる年齢（52.3歳）も最も高い。
- 最も平均寿命の短いミャンマー（61.3歳）では最も幸福度が薄れる年齢（38.6歳）は最も低い。
- 幸福度は、単純に身体的な年齢に左右されるのではなく、ライフイベントに左右される

6

まとめ

最も幸福な人とは

住居

持ち家に住む

所得

上位25%の所得水準

婚姻状況

既婚者である

生活水準

平均より生活水準が高い

研究目的　アジア地域の幸福を実証研究で明らかにすること

1. アジア地域に共通の幸福要因はあるのだろうか、
あるとするならば欧米とは異なるのだろうか？

- アジア７カ国に共通の幸福要因があり、特に介護が新たな要因として確認された。
- アジア７カ国では婚姻状況とジェンダー意識において、男女差があり、女性の幸福の価値観は欧米とは異なる。

2. 長生きすることは幸福に影響するのだろうか？

- 平均寿命の長さと最も幸福度の低い年齢が比例する。
- 長生きすることで、就職、転職、結婚、昇進や介護などのいわゆるライフイベントの時期も遅くなることがその要因として考えられる。

おわりに

本研究の限界

- 本研究では、クロスセクションによる分析のみであるため、転職や結婚といったライフイベントが幸福にどのような変化をもたらすのかを推定することはできなかった。

今後の研究課題

- 同一個人を10年以上追いかけたクロスセクションのデータなどを利用し、ライフイベントによる幸福度の変化を明らかにする。
- 「幸せだから結婚したのか、結婚したから幸せなのか」のように、幸福度に対するライフイベントの影響の因果関係の方向を特定する。

参考文献

猪口孝（編著）（2011）『アジア・バロメーター東アジアと東南アジアの価値観：アジア世論調査(2006・2007)の分析と資料』慈学社出版、27。

NHK（2014）クローズアップ現代「介護で閉ざされる未来　～若者たちをどう支える～2014年6月17日放送」（2020/03/26閲覧、https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3515/index.html）

NHK（2016）放送文化研究所「2015年国民生活時間調査報告書」、44。

澁谷智子（2018）『ヤングケアラー—介護を担う子ども・若者の現実』、中央公論新社。

真鍋一史（2006）「アジアにおける幸福と満足の文化—アジア・バロメーター調査のデータ解析」『関西学院大学社会学部紀要』100、55-70。

滝本香菜子（2018）「東アジアの幸福：日中韓と東南アジア４カ国の比較」『同志社政策科学研究』同志社大学政策学会 20（1）、 207-222。

Blanchflower, G. D., (2020) Unhappiness and Age. *National Bureau of Economic Research*, Working Paper, 26642.

Diener E., Diener M. (2009) Cross-Cultural Correlates of Life Satisfaction and Self-Esteem. In: Diener E. (eds) *Culture and Well-Being*. Social Indicators Research Series, vol 38. Springer, Dordrecht, 71–91.

Diener, E., and Seligman, M. E. P. (2004) Beyond Money: Towards an Economy of Well-Being. *Psychological Science in the Public Interest*, 5, 1–31.

Di Tella, R., & MacCulloch, R. (2008). Gross national happiness as an answer to the Easterlin Paradox? *Journal of Development Economics*, 86(1), 22–42. http://doi.org/10.1016/j.jdeveco.2007.06.008

Easterlin, R A. (1974) Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence. *Nations and Households in Economic Growth*, 89(2), 89–125.

Robert Waldinger（2015）Robert Waldinger : What Makes a Good Life? Lessons from the Longest Study on Happiness [Video File]. Retrived 2020/02/10 from https://www.ted.com/talks/robert_waldinger_what_makes_a_good_life_lessons_from_the_longest_study_on_happiness/transcript

Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Kitayama, S. (2004). Cultural constructions of happiness: theory and emprical evidence. *Journal of Happiness Studies*, *5*(3), 223–239. http://doi.org/10.1007/s10902-004-8785-9

Veenhoven, R. (1991) Is Happiness Relative? *Social Indicators Research* 24(1), 1–34.

ご静聴ありがとうございました